

『大乘莊嚴經論』XIX 功德品について

——“urtext”の推定——

岡 田 行 弘

『莊嚴經論』(MSA.)と『菩薩地』(BBh.)、即ち『瑜伽師地論』(YBh.)の本地分中第十五地の各品名が順序まで対応していることは、既に多くの先学によつて指摘されている。この対応関係は、初期瑜伽行派の思想・文獻の成立・並びにその著者又は編纂者を考察する際に、極めて重要な問題である。例えば宇井博士はBBh. MSA.とともに弥勒の作とし、MSA.はBBh.の項目をそのまま取つて見方又は論じ方を変えて殆ど再論したものであるとしている。

さて功德品を取り上げる理由は、第一に大乘仏教において特に重要な菩薩の功德という問題を両書が如何に把握しているか検討するためであり、第二にMSA.の功德品とBBh.の菩薩功德品(第十八章)は、各項目名までもが対応している、その内容の比較研究は、両書の性格の相違を明らかにするための有効な手段であると考えられるからである。本品は25の項目に細分されるが(後に①……として示す)、無性・安慧両註釈によれば、修行功德(*praiṣṭat-tiguna*)と称讃功德(*praśaṃsaguna*)に大別され、さらに前者は内容的に二分される。

(1) 修行功德(その二) ①希有から⑩主要事まで⑥・⑦・⑫を

除き、すべて六波羅蜜修行の功德を挙げ、統一されている。一方BBh.は各項目とも教理の単なる羅列に留まり、どのような立場・理由でその項目が挙げられるのかが必ずしも明確でない。なお⑥と⑦は若干の共通点があるのみであり、⑩授記では、共通部分の他にMSA.は三種の授記を説くが、BBh.より大乘的色彩が濃いと思われる。

(2) 修行功德(その二) ⑦仮設建立から⑫摂大乘まで

ここでは菩薩の修行功德の精神的・思想的な面が中心的に説かれる。まず⑦ではMSA.はBBh.と同じく四種を挙げるが内容は必ずしも一致していない。例えば諦(*satya*)の仮設建立に関してMSA.は安慧も註記・引用している如く、『解深密經』の七種真如を受けて説いているのに対し、BBh.は一種から十種までの諦を並列的に説いて全く異なる様相を呈しているのである。⑩如実遍知(*yathābhūtaparīṇāna*)は⑧尋思(*pariyesanā*)即ち空觀を瑜伽行派の立場から解釈した四尋思を基礎として、菩薩が如何に束縛を遍知して解脱するのを述べるものである。束縛・アラーヤ識・三自性・転作・顕現等の概念を実際の瑜伽行体験によつて具体的に説明しているのである。一方BBh.は四如実遍知の名称のみを挙げ、N、真実義品の説明を見てもMSA.のような独自の意義づけは見られない。なおSchmithausen教授もこの⑦と⑩を取り上げて考察し、BBh.とMSA.に関してBBh.の先在性とBBh.がMSA.に依つて成立したと見なすことは不可能であることの二点を特に指摘している。また両書の大乗觀を知る上で重要な⑫に関して、MSA.は種性・発心・六波羅蜜修行・無住処涅槃等の十種の段階によつて菩薩を分けて全大乘を摂し、大乘の菩薩の本質を明らかにしているのに

対し、Bbl. は八種の性質を挙げているが、その説明の中で菩薩藏 (bodhisattvapajaka) という言葉以外に大乘を闡明するものは見あたらない。このように MSA. は菩薩の修行道ということを土台として大乘の立場を打ち出しているのであるが、Bbl. は各項目の整理方法に固有の思想が欠けていると考えられる。

(3) 称讃功德Ⅱ②菩薩と③菩薩共通名

称讃功德とは、修行功德の完成した菩薩を称讃しつつその特質を明らかにする、或いは称讃さるべき功德を説くという意味である。

②にも両書の共通点はない。ここでは九通りの異門 (pariyāya) を説く所に MSA. の特色がある。即ち六波羅蜜修行と大菩提への誓願を有することが菩薩の本質的要件であることを、角度を変えつつ反復することによって称讃して、菩薩というものを明らかにしている。③は Bbl., MSA. とともに十六の共通名を挙げるが、Bbl. はそれのみである。MSA. の方は各々「覺りの故に (bodhat) 菩薩である」という言葉を繰り返し、その内容として三性や心・意・識の覺り (真に正しく知ること) が密意されており、瑜伽行派の菩薩のあり方としてふさわしいものである。このように称讃功德において MSA. は瑜伽行派の菩薩の理想像を浮き彫りにしているが、Bbl. ではこのような捉え方はなされていない。

以上を踏まえて両書の品名・項目名の対応を考えてみると

(a) MSA. → Bbl. (b) Bbl. → MSA. (c) “urtext” $\begin{matrix} \nearrow \text{Bbl.} \\ \searrow \text{MSA.} \end{matrix}$

の内、(a) である可能性は極めて低い。また (b) については、単に教理名目を列挙する Bbl. から、大乘の菩薩道という明確な立場を有する MSA. が、品名・項目名のみをそのまま継承したと見なすのは不自然ではないかと考えられる。即ち MSA. には品名・項目名以外

に Bbl. からの影響は特に見られず、また Bbl. においてその品名がこの順序で成立したのは何故かという問題も残る。そこで、むしろ (c) に示した如く、両書に共通の品名・項目名の次第が極めて簡潔な形で瑜伽行派の伝承としていわば “urtext” として先ず成立し、禪定において瑜伽行者が菩薩道を念ずる場合にこの次第を反復修習するという形で保存され、この “urtext” に対して立場の異なる著者が肉づけして両書が成立したと考えられる。

この “urtext” の一つの可能性として MSA. XI. VSS. 61-73 に説かれる四十四作意 (manaskāra) を挙げることが出来る。四十四作意は、菩薩道の本質とその過程・内容を順々に示すものであり、Bbl. および MSA. の品名・項目名の大部分と対応している (第一から第十六作意は、Ⅲ、種姓品から XVI、供養親近無量品に、第十七から第二十七作意は XVII、菩提分品の各項目に、第二十八から第四十四作意は XX 功德品の ①-⑩の各項目にそれぞれ対応する。Bbl. も同様)。そしてこのような “urtext” に基づいて、百科全書的な Ybl. の本地分の編纂時には菩薩に関する様々の教理・名目を列挙することによって Bbl. が成立し、また一方で瑜伽行派における大乘菩薩道という統一的な立場から解釈されて MSA. が成立したのではないかと推定されるのである。この際 “urtext” に対し、大乘經典に依つて頌を作った、即ち莊嚴したということが mahāyānastrīa-mkāra の真義であろう。實際功德品に関して安慧が指示・引用しているものに『宝積經・迦葉品』『大集經・無尽意菩薩品』『金剛般若經』『解深密經』『楞伽經』等があるが、指摘がない箇所についても頌の意味・内容を大乘經典中に求める研究が必要であると思われる。(註略)

(東京大学大学院)